第 57 号

2023 年 3 月 15 日

会報

青山学院大学
日本文学会

（題字）湯地　孝先生

巻頭随筆

新時代の日本文学科

近藤　泰弘

コロナが少し落ち着いてきた今年、今度は現実世界の変容が大きくなってきたように感じる。東京の再開発は、まず東部の、湾岸・丸の内・八重洲地区から開始されたが、今年になってからは、港区、渋谷区での開発のスピードが加速している。虎ノ門には三三〇メートルの日本一の高さのビルが建ち、渋谷も駅を完全に壊して、スクランブルスクエアの中央棟、西棟を建設中である。二〇二八年にはすべて完成し、渋谷駅全体がスクランブルスクエアとなる。駅から坂を登っていったところの、東急本店も建て替えられ、その向かいには、ドンキホーテの巨大ホテルが完成する。また、二〇四〇年までには、宮益坂の入口と、登り切った所にも超高層ビルが3棟できる。その頃には、我々がかつて知っていた渋谷の街の風景はほぼ完全になくなっていると思われる。

もともと渋谷は、浅草と並んで、東京の周辺部の古い繁華街である。だから、最古の地下鉄の銀座線は、渋谷と浅草を結んでいる。関東大震災後にできた百軒店（ひゃっけんだな）という実験的なショッピングモールから始まったもので、その当時に百軒店に出来た店として、現在に残るものに、名曲喫茶ライオン（一九二六年開業）がある。

さらにさかのぼって、近世文化の歴史からすると、渋谷は、渋谷川なしでは語ることができない。江戸時代のものでは、北斎の有名な浮世絵「穏田（おんでん）の水車」がある。これは渋谷よりやや上流、今のキャットストリートの中間あたりにあった水車である。また、青山学院の校内にも、今図書館を作っているあたりに大きな湧き水の池があり、そこを水源とした、イモリ川というのが南に流れ、広尾辺りで、渋谷川と合流していた。

このように、青山学院のある地は、青山の地名は持つものの、表参道方面よりも、古来、渋谷方面との縁が深い。上に述べたように、二〇四〇年には、渋谷の超高層ビル街が宮益坂の上まで進出してくるので、学院はだんだんとその街区の中に取り込まれていく形になると思われる。バージニア・リー・バートンの名作童話に『ちいさいおうち』（石井桃子訳・岩波書店）があるが、青山のキャンパスの一号館、二号館は、二十一世紀末には、超高層ビルに囲まれて、あんな感じになるのではないだろうか。

そういうことで、二十一世紀末の渋谷と青山のキャンパスは今とは大きく変化していると思われる。これは、その立地や建築物の変化であるが、五〇年間の渋谷の風景と文化の変化を見てきた自分からすると、これから八〇年くらいの文化の変化もまた大きいものだと予想できる。渋谷の都市文化も、一九七〇年代の堤清二（辻井喬）率いるパルコ文化から、二〇〇〇年代以降、東急グループの牽引する新都市型の実用本位の文化に変わってきたような気がする。建築物で言えば、古い代表は、旧パルコ、そして東急がその流れを引き継いだ109やBunkamuraである。新しい代表は東急ヒカリエである。学生の気質も、八〇年代の『なんとなくクリスタル』（田中康夫・河出書房新社）で戯画的に描かれた「おしゃれ」な姿はすでにまったく消え失せ、実用本位の文化が全盛を誇っているかのように見える。学問世界にもその「役に立つ」波は押し寄せているわけだが、この方向がさらに進展していくこれからの二十一世紀の文学・語学研究には、相当に厳しい道が待っていると予想されてもいる。しかし、人工知能の研究をしていると、逆説的に、自己の内面を深掘りする、文学や自国語研究の重要性が再認識される時代が来るのではないかとも思えてくる。未来は予測できないが、絶対に日本語・日本文学が消えることはないだろう。新しい時代の日本文学科の研究を楽しみにしていきたい。

随想

来し方の記

土方　洋一

せっかくの機会なので、もう記憶している人も少ないかもしれない昔話でもしてみよう（いやがられるかもしれないけど……）。

僕は一九八六年四月に、故永藤武氏（近代文学）・篠原進氏（近世文学）とともに、学科最年少の専任講師として日本文学科に着任した（永藤・篠原両氏は助教授）。

当時は、日本文学科の合同研究室も、教員の個人研究室も、キャンパス奥の八号館にあった。教員研究室が慢性的に不足していて、個人研究室が与えられるのは専任教授だけ、助教授以下は二人部屋というのが習わしだった。その下の専任講師は、ほかの学科の講師と一緒くたに講師室のようなところをあてがわれることになっていたらしい。「それでは気の毒だ」ということで、学科主任だった岡保生氏と堀内秀晃氏が相談して、堀内氏の個人研究室に机を運び込んで間借りをさせてもらうことになった。広くもない個人研究室にもう一人入り込んでくることになって、さぞご迷惑だっただろうと思うが、人格者の堀内氏はいやな顔もせずに受け入れてくださった。

その翌年、矢嶋泉氏（上代文学）が着任すると、僕と矢嶋氏とは学科研究室から遠く離れた五号館に二人で一室をあてがわれた。どなたの発案か知らないが、この二人は危険分子だから隔離してしまおうと考えたのだとすれば慧眼というべきであろう。

そのまた翌年に、今の十四号館（総研ビル）が立ち上がると、日本文学科と教育学科とは新しい十四号館へと移動することになった（まだ教育人間科学部はなく、文学部の中の教育学科だった）。この時はじめて、助教授になった僕にも個人研究室が与えられることになった。三年連続で引っ越しをさせられ、いまの「ひじ研」の住人に落ち着いたわけだ。

着任の際のごたごたで個人研究室のありがたみを知ったから、逆に研究室は基本的に学生のためのものという考えが芽生え、自分の勉強のために使うことは初めから半ば放棄した。オフィスアワーのようなものも特に設けず、「いつでもどうぞ」という構えだったため、この研究室で多くの学生諸君と過ごすことになった。研究室で熱心に勉強している人（これがスタンダード）、勉強以外の人生相談に来る人、ただおしゃべりがしたくて来る人、待ち合わせのために来る人、お茶を吹く人、泣き崩れる人など、いろいろな学生がいた。「ひじ研」からただならぬ異臭を発生させた奴らもいて、このときは危うく始末書を書くところだった。彼らにとって、「ひじ研」は「部室」であり「お茶の間」であったようで、だから研究室をなつかしい場所としておぼえてくれている卒業生がたくさんいるのはうれしい。そんな「ひじ研」の歴史も終わる。

「ひじ研」の歴史は十四号館の歴史とともにある。築後三十五年、阪神淡路大震災以前の耐震基準によっているので、まもなく建て替えという話が出てくるだろう。そうなると、十四号館に最も長く居を構えていた教員、という名誉？に浴することになるかもしれない。

もし将来十四号館が新しい建物に変わったとしたら、その新館の陰の隅っこにでも、「かつて「ひじ研」ここにありき」という小さな石碑でも建ててもらいたいぐらいのものだ。というのは冗談だが、僕の心の片隅には、そんな小さな記念碑を建てておきたいという気持ちもなくはない。

研究余滴

若菜巻の出現

高田　祐彦

「出現」といっても、新しい写本が発見されたわけではない。すみません。

『源氏物語』が書かれ、流布する過程で、若菜巻という長大な巻が出現したこと、そして、それが上下巻に分かれるということについての雑感である。

若菜巻は、上下巻がほぼ同じ長さで、両者を合わせると『源氏物語』全体の十分の一ほどの分量を占める。十巻編成の角川ソフィア文庫では、一冊をあてている。巻の長い順トップ10は、若菜下、若菜上、宿木、総角、夕霧、浮舟、手習、東屋、蜻蛉、少女となるが、若菜上巻は、その登場時点で、そこまででもっとも長かった少女巻のちょうど倍、上下巻合わせれば、少女巻のほぼ四倍にも及ぶ。

「上下合わせる」と繰り返したのには、理由がある。実は、若菜上下巻は、もともと一巻であったらしい。平安時代末の注釈である『源氏釈』や鎌倉時代初めの藤原定家の『奥入』などに、ただ「若菜」として上下巻にわたる注を記していることがその根拠であるが、その後、十三世紀後半の『紫明抄』や『光源氏物語抄』（以前は「異本紫明抄」と呼ばれていたもの）になると、上下に分かれるのである。ということは、鎌倉時代になってから上下に分けられたのであろうか。

『源氏物語』がどのように書かれ、流布していったかということは、残念ながらほとんどわからない。巻ごとの冊子形態で、ある程度現在の巻序のとおりに（一巻ずつでなくとも）流布していったのだとすれば、突然、それまでとはまったく規模の違う「若菜」という巻が現れたとき、読者には相当のインパクトがあったに違いない。

一つ前の藤裏葉巻は、まさしく大団円というにふさわしく、ここで物語は完結した、と思った読者もいたことだろう。若菜巻は、藤裏葉巻を直接に受けて始まっている。とはいえ、主人公の栄華の後を描く、という展開は、『うつほ物語』や『落窪物語』といった『源氏物語』に先行する物語から見れば、異例だ。もちろん、作者の独創を称えてよいが、めでたしめでたしの物語では飽き足らない読者たちの成熟もあったはずである。

その若菜巻が、鎌倉時代になると上下巻に分かれている。しかも、分量は奇妙なほど等しい。基本文献である『源氏物語大成 校異篇』で見ると、一頁35字×14行＝四九〇字で組まれた本文で、若菜上巻は、九十五頁と11行。若菜下巻は、それよりたった7行多いだけである（室町時代の写本の翻刻であるが）。これほど分量が等しいのだから、「機械的に上下に分冊」したものか、という島津久基の見解（『紫式部の藝術を憶ふ』）ももっともである。

しかし、鎌倉時代になって誰かがそうしたとして、それまで一巻だったものが、みな右へならえで二巻になった、などということがあるのだろうか。あるいは、『奥入』などが「若菜」としていても、それは上下巻の総称であって、実態は上下に分かれていた、と考えるべきか。それを遡らせて、最初から上下に分かれていたとするなら、奇妙なまでの分量の等しさをどう考えるべきか。これほどの分量の等しさは、偶然にも意識的にも難しいとすれば、もしかしたら、最初から紙の枚数が決まっていたのか。『枕草子』三巻本の奥書には、中宮定子から紙を与えられたとある。…いや、やっぱり機械的な分割、それもごく初期に、か。答えの出そうもない想像、「余滴」たるゆえんである。

日本文学会秋季大会

ご講演：伊藤比呂美先生

「日文と文学とわたし」

博士後期課程三年　安藤　優一

二〇二二年一一月二六日（土）、青山学院大学日本文学会の秋季大会が三年ぶりに対面形式で開催された。講演では、本学日本文学科卒業生でもある詩人の伊藤比呂美先生より「日文と文学とわたし」と題して、在学中のことから、質疑に代えての人生相談まで、多岐にわたる話題が展開された。そのごく一端ではあるが、ここに書き留めておきたい。

伊藤先生がまず語られたのは、在学していた期間中には学食を一度も食べなかったという話であった。それは摂食障害を抱えていた時期とも重なり合っていたためだった。「どういう風に生きればよいのか？」という問いかけとともに、鏡に映る自身の姿を見ていたという。のちにそれは「おんな性を取りたかった」ためだとわかったという。「ノンバイナリー」という言葉も知られていなかった当時にあって、セクシュアリティをめぐる自己規定の揺らぎ、母という存在との対峙など、葛藤の根源にあることについて語られた。

そうした状況にあって常に傍らにあり続けたのが文学であった。学生運動の余波から「荒れ果てて自由しかない」という都立高校時代。伊藤先生にとっては、文学の世界へ深く傾倒する時期でもあった。太宰治や中原中也の作品に親しむ中で、詩作を始めるようになったという。そのために、大学では学問や研究ではなく、とにかく創作がしたかったという。

表現へのあくなき欲望から、在学中は日本文学学校にも通いながら詩作を学んだ。そこで師事した阿部岩夫氏は自身にとって初めて出会う詩人でもあり、鮮烈な印象を残したという。日本文学科では林巨樹先生のゼミに所属し、国語学的に文学作品を分析する面白さを学んだ。たとえばそれは、二葉亭四迷の『浮雲』の作中にある「ものを」という語を計測する作業であったという。内容というよりも、言葉の方面から作品の中に分け入っていくような経験でもあった。大学と文学学校、それぞれの場で「言葉」と向き合い詩作を続けていく中で、入学当時に悩まされていた摂食障害もなくなっていったという。

身体や性をめぐる関心と探求は自身の詩の世界にも深く投影されているが、文芸サークルでの縁から手がけた、アメリカ現代詩の下訳や、雑誌『フェミニスト』に携わった経験も大きかったという。配達先である新宿の喫茶店の一隅で開かれている集会に参加し、女性たちの体験談に接する中で、理論ではなく身体でわかる部分からフェミニズムの世界へ入ることとなった。それが「伊藤比呂美という人物の最初だった」と振り返られた。

講演を通して繰り返し述べられていたのが、外部の世界への視座を持つことであった。それは近現代日本文学のみならず、古典文学への関心（特に挙げられたのが『日本霊異記』と『発心集』であった）、外国文学・言語に接することの重要性であった。おすすめの本として、アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』、石牟礼道子『苦海浄土』、ゼーバルト『アウステルリッツ』、よしながふみ『大奥』、そして自著からは『とげ

第五十七号　目次

巻頭随筆　2
随想
研究余滴　4
日本文学会秋季大会　3
国際シンポジウム　5
研究レポート　7
就職活動　8
みなさんへのメッセージ　12
大学院に進学して　13
夏期集中講義報告　14
留学生の動向　15
今年度の学生の活躍　16
日本文学科関係書籍　16
院生部会報告　17
研究室探訪～滝澤みか先生編～　18
日本文学科同窓会から　20
二〇二二年度講義題目　20
研究室だより・編集後記　24

抜き　新巣鴨地蔵縁起』を挙げられた。

質疑では先生が長年、新聞紙上で担当されている人生相談コーナーに模して進められた。「文学作品を読むことに興味がない私にとって読書に代わるものはないか？」という、時に「Challenging な問い」も発せられる中、伊藤先生が語られたのは、作者の意図を考えるというような読み方ではなく、意図を超えた無意識の部分を引き出すような読み方の重要性であった。

講演の終わりには「重箱の隅をつつくような勉強はするな」「もっと本を読んでほしい」という言葉とともに締めくくられた。先生は「呪いをかけるように」とおっしゃっていたが、と同時に、これまでの定型的な読みや固定概念という呪縛を解く言葉でもあると感じられた。

卒業生　**西井弥生子**

「伊藤比呂美です。はじめまして。ここにいるのは、先生じゃなくて単に卒業生のおばさんだと思ってください。」。第一声に、日文生なら身に覚えのある話題が続き、会場は笑顔に包まれた。学食に話が及ぶ。伊藤さん（親しみと敬意を込めて）は在学中に学食を一度も食べていない。摂食障害であったからだ。「ノンバイナリー（non-binary）」ということばもなかった時代、拒食は自らの〈オンナセイ〉を否定するためのものであったと振り返られた。

乱読は現実から逃れるためであった。日文では、国語学を専攻した。林巨樹先生のゼミでは、内容ではなく、ことばから文学のなかに入る。創作をしたくて文学学校にも半年ほど通った。詩人の阿部岩夫氏から「オノマトペがいい」と褒められると、林先生に聞きに行く。その頃の詩「ガ行鼻濁音のイメージ」を朗読された。詩のなかの「ゲルマニア」の「ゲ」、「十五」の「五」等を例にガ行鼻音、ガ行鼻濁音の使い分けについて解説された。「未体験であったセックス」についてであるとも明かされた同詩が林先生との対話を経て生み出されたことが驚きであった。

経済学部の渥美育子先生との出会いもあった。フェミニズムの詩集（『お母さんは……――シブ・シダリン・フォックス詩集』）の下訳を請け負った。直接的な性表現が多く、自らの詩のなかで使い始めると話題になった。摂食障害も改善された。雑誌『フェミニスト』配達先で、一詩人として集会に加わる。身体で分かるところしか書かない、理解しない、というかたちでフェミニズムに近づいていった。女性詩の牽引者として知られる「詩人・伊藤比呂美」がこうして苦闘の末に誕生した経緯を知ることができた。

外国に行けない今こそどんどん外に出て行って新しいことを見つけて欲しい、と本をご紹介くださった。伊藤さんの著書では『とげ抜き 新巣鴨地蔵縁起』が「女の子として生まれて育てられた子たち」に特におすすめであるという。

最後に、リアクションペーパーに綴られた学生たちの人生相談を読み上げていった。なかにはchallengingな悩みもあるが、快刀乱麻を断つ。いわく「変人になれ～、親を苦しませろ～、重箱の隅をつつくような無駄な勉強をするな～、本を読め～。」。最後の最後に「呪い」をかけていただいたが、それは先達からの力強いエールであった。ご講演はライブ感満載で、ことばの豊饒な世界を垣間見ることが出きる、まがいもない文学的な体験であった。

国際シンポジウム報告

歌舞伎の東西―絵と文化

博士後期課程三年　天野　早紀

二〇二二年三月十九日（土）、日本文学会主催の国際シンポジウム「歌舞伎の東西：絵と文化」がオンライン（Zoom）にて開催された。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により延期となって今回実に二年越しの実現となった。

本シンポジウムでは、歌舞伎という総合芸術、中でも「絵」を切り口とする。講演では文学・芸能研究専門の先生方をお招きし、西も東も、さらに海外はイギリスもと、現今の時勢ながら国際シンポジウムとして広くオンラインで繋がった貴重な機会となった。

プログラム前半はアンドリュー・ガーストル先生（ロンドン大学）と倉橋正恵先生（立命館大学）により、歌舞伎にまつわる「絵」について特に芸能面から観察される。

役者から贔屓へ、襲名や追善などの行事を告知する「摺物」は、歌（俳諧や狂歌）と絵とが同居する一枚摺りの錦絵であり、特に花紅葉や雅楽の舞台・楽器等、雅の世界が描かれるもの――江戸の社会的地位の枠組では下位に位置付けられる役者が、しかし絵と歌に寄せて自らの演ずる歌舞伎に文化的・芸術的地位を与える〝雅〟の見立て世界――が例示された。

また贔屓から役者への支援の取り組みとして、私的な贔屓仲間との「番付」の囲み見、「役者絵」の収集やこれを貼り付けた団扇制作、また彼らが劇場に集い〝贔屓連〟となれば上演時の盛り立てや劇場前に飾る贈り物による競い合いがある。贈り物の形態も、衣装、役者絵制作への出資、作家による役者関連の著作執筆など実に多様であった。

プログラム後半は神楽岡幼子先生（愛媛大学）と大屋多詠子先生（青山学院大学）により、歌舞伎の「絵」に関わる文学的側面にも併せて注目がなされる。

安永五年（一七七六）の恋川春町の黄表紙『其返報怪談』（そのへんぽうばけものばなし）においては、物語の場、登場人物・化物、化物が化ける仮面としてのそれに至るまで全編通じての重要な鍵となる「役者絵」「団扇絵」に着目し、描かれる役者やそれに扮する化物たちの所作、服装、場面構成や台詞等から、本作が安永四年（一七七五）の中村座の実際の興行に基づくこと、その文化史的意義が指摘された。

また文化年間（一八〇四―一八一八）の曲亭馬琴（江戸の人、当時四〇代）の読本作品について、これが大坂を中心として贔屓の作家・役者・「絵入根本」刊行書肆を得ながら数多く演劇化されたこと、馬琴自身も大坂での自作の興行には褒詞や「摺物」を贈ったことが示された。馬琴の読本の理想は本来史伝物にあったが、当時演劇界での〝流行〟の点からはやはり捨て難い作であったと七〇代頃になってこれを省みる。文化年間の馬琴は自身の文学的理想の一方で当代の演劇の影響力を見据え、戦略的に演劇取材の作を執筆した可能性が提示された。

総じて、歌舞伎における「絵」とは、東西を跨いで役者・（劇）作家・観客・劇場・芝居町をはじめとした生きた場・人間関係を築くものであり、その生きた人間模様を日常非日常を含み込む演劇コミュニティとして活写する記録でもあり、また異なる芸術領域間の交流を築く架橋でもあったといえよう。それらを鑑賞し研究する私たちも、今日この時、歌舞伎と絵によって結ばれた充実のシンポジウムとなったことを確信する。

博士前期課程二年
ランフォード・エイデン

二年遅れでしたが、今年3月19日にシンポジウム、「歌舞伎の東西―絵と文化」を本学の教員と発表者の方々の努力によって成功させたのは、本当に目出度いことと存じます。学生の皆様はもう馴れている（飽きている）かも知れませんが、こうやってオンライン会

議ソフトで、国境を越え、国際的に情報・知識交換を出来ることは、留学生の私にとっては、日本文学のみならず、「八百万の」分野の発展に期待して、心強いことです。

この度の発表者は、ロンドン大学名誉教授アンドリュー・ガーストル先生、立命館大学の倉橋正恵先生、愛媛大学の神楽岡幼子先生、そして本学の大屋多詠子先生でした。大屋先生は曲亭馬琴と演劇との関係についてご発表なさり、神楽岡先生は「黄表紙の祖」とも称されている春川恋町の怪談、似顔絵を題にした作品『其返報怪談』をお取り上げになりましたが、紙幅の都合で、残りのお二人のご発表について感想を申し上げます。

ガーストル先生は上方における「摺物」、つまり詩歌を添えた絵の作品類、そして江戸時代の芸能界の有様を手短にご紹介なさいました。この中に特にお面白いと思ったのは、常識でもある江戸時代の士農工商という身分制度ですが、役者などの場合はこれに含まれず、その為に微妙な自由を得られた、というご解説でした。号を使いながら芸能界に参加したのはあらゆる身分の人達であることから、表面的には厳しい身分制度の実際は如何だろうか、どういう特例、どういう矛盾があったかということを考えさせる内容で、歴史の本当の様子を把握するには、英語では「勝者が歴史を作る」と言いますが、強者・勝者が残した資料にだけ頼るのではなく、範囲広い証拠を批判的に見ることが必要だ、という意識を補強してくれました。

倉橋先生のお話は大変面白く、近世近代の境を中心として、役者には欠かせなかった贔屓文化の解説して頂きました。贔屓活動というのは基本的に現代の所謂「ファン」とは異ならないと先生が率直に仰ったことが刺激的でした。現代人の我々は、過去の人々とかけ離れていると思いがちですが、やはり現代の物の見方は過去の何処かを引き継いでいて、だからこそ、詳細は違っても、根本的なところは全く理解できないはずがありません。現代の常識で過去を理解するのは愚かで、現代の基準で過去を計れないとは言うものの、加減良く、その限界に留意しつつ、現代の物の見方を反映させることで、より深く過去が理解できるのではないでしょうか。

発表者四人はもとより、この度のシンポジウムに関わった方々、視聴者の皆様にお礼申し上げます。

研究レポート

『蛙のゴム靴』におけるオノマトペの特徴と効果

三年　佐々木花純

私たちが日常的に使用していることばの中で、特別意識されているわけではないものの、言語表現に深く根を下ろしている分野が「オノマトペ」である。本稿では宮沢賢治の『蛙のゴム靴』という作品で用いられているオノマトペに注目し、それらの感覚的表現の特徴と効果について述べようと思う。

今回参考にした本文は一九七九年十一月十五日に初版第一刷が発行された『新修宮沢賢治全集 第十一巻（筑摩書房）』を底本とするものであり、作品の成立時期は不明である。作品の主要な登場人物は話の軸となる三匹の蛙、そして他二匹の蛙の計五匹である。自然豊かな水辺で暮らす蛙たちの身体や行動についての繊細な表現や、宮沢賢治特有のオノマトペ表現について分析しようと思う。

『蛙のゴム靴』の本文において

用いられているオノマトペを、小笠原智子（二〇〇四）に基づき分類した。分類される型と集計結果は次の通りである。

(1)語基反復型：40個（ABABまたはABABABのようにもとのオノマトペを繰り返す。）
(2)促音付加型：0個（最後に「っ」「ッ」が付く。）
(3)り付加型：6個（最後に「り」が付く。）
(4)撥音付加型：5個（最後に「ん」が付く。）
(5)長音化型：1個（最後に「あ」または「う」が付き、伸ばす音となっている。）
(6)その他の型：1個

集計を見ると語基反復型が全体の七割以上を占めていることが分かる。川崎めぐみ（二〇一六）には語基から語としてのオノマトペが派生する最初の段階において反復／非反復か が選択され、その後付加／非付加、つまり長音・促音・撥音などが選択されるためにオノマトペ全体の中で語基反復型の割合が必然的に多くなると述べられている。しかし『蛙のゴム靴』の内容に注目すると他にも理由があるように思われる。作品の描かれ方に注目すると、作者は三匹の蛙それぞれの心情に寄り添いながら描くよりもそれぞれの行動を追うということに重点を置いて描いているのが分かる。

そして作中で用いられている語基反復型のオノマトペの多くが「泳いでいる際のオノマトペ」または「歩いている際のオノマトペ」であることからも分かるように、語基を繰り返すタイプのオノマトペは「継続して起きている行為や状態を表現する際」に使用されることがほとんどである。つまり、行動の流れや継続性を表現するために、語基反復型のオノマトペが多く用いられているのではないだろうか。

また、オノマトペの表現は個人の肉体的感覚や精神的感覚に依存している部分があるため、行動の様子を短く分かりやすく表現するのと同時に表現自体に主観性を与えることができる。あからさまな心情表現をせずとも間接的に登場人物のこころの中を描くことで読み手は蛙たちの感情を「察する」のである。

この分析を通して、賢治のオノマトペ表現は単に「独創的」という言葉でまとめられるものではないと感じた。オリジナルの基本要素を見つけにくいものもあれば基本要素や派生要素を組み合わせて作ったものもあり、あるがままの音をそのまま表現したようなオノマトペも用いられていた。感覚的な要素が大きい分、共通認識に頼りがちなオノマトペの読み取りだが賢治のオノマトペの研究は共通認識の枠を飛び越えて読み手に訴えかける力を秘めている。フィクションの中で自分の持つ知識を最大限生かしている賢治の表現方法は、読み手をいつの間にかイーハトーヴの世界へと没入させてしまうリアルさを生み出しているのだろう。

＜参考文献＞
小笠原智子編「宮沢賢治の童話でのオノマトペ（苏讯江訳）」（『日本語知識』二〇〇四年、第五期三～四ページ）
川崎めぐみ氏「語構成から見た方言オノマトペのタイプと意味の関りについて」名古屋大学院大学論集 言語・文化篇二七巻二号、二〇一六年三月三十一日

現代を生きる「文学」の在り方
―日本の詩人北園克衛と、朝鮮の詩人金璟麟（キム・ギョンリン）から見る

四年　HAN MINHEE（ハン ミンヒー）

大学二年生であった二〇二〇年は、大学キャンパスに行き来できず、自国の韓国で授業を受けていました。尤も印象に残った授業が、小松靖彦先生の戦争下の文学者を取り上げる日本文学特講Ⅱ［1］です。そこで北園克衛という詩人をはじめて知り、彼の空白を活かした詩の世界観に魅了されていきます。更に興味深かったのは、北園克衛は、朝鮮の詩人金璟麟（キム・ギョンリン）との交流があった人物であるということです。当時、東アジアを取り巻く戦争への緊張感や、日本と朝鮮の政治関係などを考えると、二人の間にあった交流が想像の付かない、不思議なものに思われるのではないでしょうか。しかし、彼らは文学を媒体として交流し合っていたのが確かです。留学生でありながら韓国で授業を受講するしかないと嘆くばかりいるのではなく、朝鮮の詩人金璟麟（キム・ギョンリン）について

調べるに恵まれた環境を上手く利用してみました。

金璟麟（キム・ギョンリン）は、一九四二年早稲田大学土木学科を卒業した、日本留学生です。留学前は一九三九年朝鮮日報に「車窓」「畫眼」など詩を発表し、文学活動に足を踏み入れます。彼の詩は、日本の影響を受けていて、外界の事物を鮮明な絵画的なイメージで形象化しようとするところに、その特徴があります。また、観念や感性のみに頼ることではなく、常に時代状況を意識し詩を書くようにしていました。後期作品には、朝鮮戦争の悲劇から抜け出せずにいた韓国社会と、それを置き去りに進むかのような現代文明を見詰めながら、その挾間での生まれる自我の混乱をもイメージ化しています。

北園克衛との交流や、本格的に文学活動を始めたのは、モダニズム同人会『VOU』に参加したのがきっかけだと思います。韓国で入手した『証言からの文学史』という本にキム・ギョンリン自身のインタビューが残っていました。特に北園克衛との関連のあるもののみを抜粋し、私自身による翻訳を交えつつ紹介したいと思います。

まず、日本で詩人として活動を決意したきっかけについて、「せっかく日本に来ているのだから、日本のモダニズム詩壇で活動してみたいと思いました。」「そのときが22歳程でして、詩を書こうと雑誌を調べてみるとモダニズム系統の雑誌が二つくらいありました。一つが『VOU』で一つは『新領土』でした……」というふうに、詩を書こうと雑誌を調べていたのが、北園克衛の出会いへの一歩です。更に『VOU』を選んだ理由に時代を実感する答えが続きます。「『新領土』は社会主義意識が強い雑誌だったからです」。金璟麟（キム・ギョンリン）の故郷である咸鏡道（ハンギョンド）会寧市蘇滿（ソマン）は、中国と隣接する国境地域であり、日本による反共教育が徹底的に行われていた地域です。その影響で共産主義に対する抵抗感から『新領土』を諦め、『VOU』を選んだといいます。日本と朝鮮における時代状況は、ある時は二人を会わせたものでもあったようです。

次に、北園克衛に関わる質問の答えには、北園克衛と金璟麟（キム・ギョンリン）の会話を通して、北園克衛自身の時代認識を覗き見ることができます。作者は質問します。「『日本近代文学辞典』を探してみたところ、『VOU』も時代によって分けられていることが分かりますが、当時のリーダーは北園克衛で合っていますか？」。金璟麟（キム・ギョンリン）の答えです。「そうです。北園克衛は、日本国内の文壇だけではなく、世界的に広く知られていた人物でした。エズラ・パウンドとの付き合いも深いものであって……、北園克衛を直接訪ねたら、同人になるためには、同人全員の同意を得られなければならないといい、待つように言われました。」「そして、朝鮮人は政治的には不遇かも知れないが、文学においてまで不遇である必要があるかと、彼が言い加えました」。このように北園克衛は、日本と朝鮮の政治的状況、つまり時代をしっかり認識していたと伝わります。「朝鮮人は政治的には不遇かも知れないが、文学においてまで不遇である必要があるか」という言葉からは、彼の見ていた、見出していた「文学」の意義について考えさせられます。確かに北園克衛や、金璟麟（キム・ギョンリン）の詩には時代が溶け込んでいるものが多くあります。しかし彼の言葉は、時代に影響されながらも、北園克衛と金璟麟（キム・ギョンリン）の関係に橋を架けたように、人と人を結ぶ役割として、「文学」はあくまで「文学」で存在しているのだと、悟らせるものであったと思います。

前掲のように、二〇二〇年はコロナウイルスの影響で、登校できない状況でした。世の中の人々の日常もあらゆるところで変化がありました。二年が過ぎた今はロシアのウクライナ侵攻が世界的な問題となっています。この時代において「文学」は、どのようにあるべきか、それを通して、私たちは何を未来に繋いでいけるのか考えられる時点だと思います。北園克衛と、金璟麟（キム・ギョンリン）の「文学」は、時代を乗り越えるものであったと信じます。

最後に、金璟麟（キム・ギョンリン）の詩「車窓」を翻訳して置きます。

私は水族館に来た一匹の魚族／滑り落ちる外の世界が吹く哀愁で／眼鏡は冷える

【参考文献】

［金璟麟］キム・ギョンリン（韓国現代文学大辞典、二〇〇四年、参照二〇〇二年一〇月一〇日）

小松靖彦『戦争下の文学者たち―『萬葉集』と生きた歌人・詩人・小説家』（花鳥社、二〇二一年）
강진호（ガンジンホ）・이상갑（イサンガプ）・채호석（チェホソク）
（二〇〇三年）『証言からの文学史』
김윤식（キムユンシク）샘
（翻訳：HAN MINHEE）

遅れて翻訳される蛙のことば――草野心平「ごびらっふの独白」論

三年　魚津瑳矢人

「ごびらっふの独白」は、草野心平『日本沙漠』に収録されている詩である。

次に本文を抜粋する（注一）。

るてえる　びる　もれとりりがいく。
ぐうであとびん　むはありんく　るてえる。
（中略）
いい　びりやん　げるせえた。
ばらあら　ばらあ。

日本語訳

幸福というものはたわいなくっていいものだ。
おれはいま土のなかの靄のような幸福に包まれている。
（中略）
美しい虹だ。
ばらあら　ばらあ。

この詩は蛙の「ごびらっふ」による「独白」であるが、見ての通り、はじめに蛙の言葉が、その後に「日本語訳」が記されるという形を持つ。

草野は蛙を題材とした詩を多く書いた。それらには、蛙が鳴き声のような一見意味のない音を発する詩と、人間のようにはっきり意味を持った言葉を述べる詩のどちらもがある。

しかし、鳴き声あるいは蛙語に対応した日本語訳が記される、という詩は殆どない。

「ごびらっふの独白」以外には、「Aコンドルの禿の由来」（注二）（以下、「A」）が例としてある。が、この詩は「ごびらっふの独白」（以下、適宜「ご」）とは幾分ちがう性質をもっている。

次に一部引用する。

ない　ぎゃり　おれろ　（おれを喰うなよ）
すでっけん　（損するぞ）
Aコンドルはもうガア蛙の真ん前。風にゆらぐ天幕のようにおおいかぶさり。
びやあ（馬鹿ア）

とガア蛙は叫んだが一瞬するどい爪のなかのもう茶巾ずし。

ふたつを比較してみる。「A」は三人称視点であり、蛙は鳥の餌食になるという相手役のような存在である。「ご」は蛙の、一人称での個人的発話である。

また、「A」での訳は一行ごとに、かっこで逐一書かれる。「ご」は蛙の言葉の後に、種明かしのように日本語訳が書かれる。

内容の面でも、少しちがう。「おれを喰うなよ」という食う・食われるの動物的なやりとりである「A」に対し、「ご」は人間のような思索的な独り言である。

以上より、「ごびらっふの独白」は個人的な思考の「独白」であり、一見意味不明で、後ろに訳が示されることで漸く意味がわかる、その内容は蛙のイメージから少し離れた精神的哲学的なものである、とまとめられる。

この詩の形式は、独白の内容を引き立てる。ごびらっふは「みんな孤独で。／みんなの孤独が通じあうたしかな存在をほのぼの意識し。／うつらうつらの日をすごすことは幸福である。」とする。蛙の言葉は同じ蛙には通じるかもしれないが、人間にはそのままではわからない。人間の読み手は付される訳によって、ごびらっふの言葉の内容をはじめて理解できる。この言語的な制約は言いかえれば生きものの間の壁であり、いわばひとつの「孤独」である。

しかし、この詩には孤独それ自体を幸福と捉えるような前向きさが窺われる。そういった隔たりを悲観しないのである（注三）。ごびらっふの元の独白を人間の読み手は把握できないが、ごびらっふの観点ではそれも受け容れられているのではないか。

「ごびらっふの独白」は蛙の言葉で記され、訳が後に付される。孤独を肯定し、幸福をありのままに感じるという内容をその形式が引き立てる、そういった特質を持った詩である。

◇注

一……『日本詩人全集二十四　金

子光晴・草野心平』（安東次男・山本太郎編、新潮社、一九六七）より引用。
二……『第四の蛙』に収録、『日本詩人全集』より引用。
三……西村成樹（二〇一八）氏は『日本沙漠』について「生命への愛情、ヒューマニズムという傾向がより強くなっている（「誕生祭」「ごびらっふの独白」など）。」と述べる（西村成樹「草野心平の蛙詩の変遷（五）全時代を通じての蛙詩」、社会文化研究所紀要、二〇一八、第七九号、一〇五～一二二頁）。

就職活動

みなさんへのメッセージ

「一般企業への就職活動を通して」

四年　長友　理桜

「どんな仕事をしたいかなんて、わからないよ」と思っていた私が体験記なんて恐縮ですが、これから就職活動に立ち向かう皆さんのお役に立てたらと思い、書いています。同じような悩みを抱える方の不安を、少しでも取り除くことができたら嬉しく思います。

さて、私の就職活動ですが、三年生の秋頃にスタートしました。友人が早期内定を貰ったという話を聞き、慌てて始めたことを思い出します。しかし冒頭でもお伝えした通り、当時の私には希望する業界や職種がありませんでした。何が自分に向いているのかがわからなかったのです。

そこからなぜ、納得のいく就職活動ができたのか。振り返ってみると、私の場合、ポイントは二点あったと感じています。一点目は、自分の経験を丁寧に振り返ったことです。何をしているときに没頭できたかを考えてみると、私はダンスの練習をしているときのことや、アルバイトでwebサイトの修理をしているときのことが思いつきました。そこから、今の状態をさらに良くすることを考えるのが好きなのだと気づき、「新サービスの企画っていいな」というように、やりたいことについて考えを深めることができました。二点目は、流されながら楽しんで就職活動をしていたことです。最終的に決めるのは自分だと思います。しかし、思いもしなかった偶然が、その先に繋がることもあると思います。私は、先輩が教えてくれた就活サービス経由で開催を知った会社の座談会に参加しました。そしてその会社の、自由プレゼン形式のユニークな面接を受けました。選考の中でどんどん志望度が高まり、最終的に内定をいただけたので、入社を決めました。就職活動中、色々なことを考えるうちに、思い詰めたり取り繕ったりしたこともあります。ですが、肩の力を抜いて自分らしくしていたときの方が上手くいった気がしています。友達と、就職活動とは関係のない話をする時間をとることも忘れないでほしいと思います。

やり方や希望は人それぞれ違います。比べる必要はなく、自分のペースで、自分の方法で進む道を見つけていくのが大切だということを、就職活動を通して学ぶことができました。このことは就職活動に限らず、今後の人生の鍵になると信じています。これを読んだみなさんが、ご活躍の場をさらに広げていかれることを願っています。

「就職活動みなさんへのメッセージ【公務員】」

四年　島田　果歩

就職活動を始めたのは、大学二年生の冬でした。公務員試験対策のため予備校にも通い始めますが、この時点では民間企業への就職も視野に入れていました。

三年生の秋ごろまでは、公務員試験の勉強もしつつ、説明会やインターンシップへ積極的に参加していたと思います。

最終的に私は公務員専願を決意しましたが、民間企業に割いた時間が無駄であったとは思っていません。併願をすることで自分の視野を広げられたと感じますし、民間企業の就活対策は公務員の面接試験に活かされました。もちろんデメリットもありますが、現段階で公務員専願の方も、余裕があれば民間企業のインターンシップなどに参加してみても良いかもしれません。

公務員専願にシフトしてからは、とにかく試験勉強に励みました。公務員試験は勉強しなければなら

ない科目が多いです。さらに、職種によって出題される科目が異なるので、自分の志望先に合わせて勉強する科目を選択する必要があります。科目ごとの問題数や配点比率によって、どの科目に重点を置くべきか考える必要もあります。なので、効率よく勉強を進めるためにも、早めに志望先の試験概要に目を通し、出題科目や問題数を把握しておくことを強くお勧めします。具体的な勉強方法についてですが、私は全ての科目を満遍なく勉強するようにしていました。科目が多いという公務員試験の特性上、浅く広く知識を蓄えていくのが良いと考えたからです。そのおかげもあってか、筆記試験は無事突破することが出来ました。

筆記試験を通過すると、面接試験が待っています。面接試験は非常に重要です。入念な準備が必要になってくると思います。そこで皆さんには是非、進路就職センターを積極的に活用していただきたいです。進路就職センターの方々が企画してくださる説明会やセミナーなどに積極的に参加してみてください。私も面接対策で何度もお世話になりました。その結果、私は無事志望先から合格を頂くことが出来ました。

最後になりますが、公務員試験は長期戦になります。だからこそ、楽しんで戦い抜くことが大事だと思っています。気負いすぎずに、けれども情熱を持って、頑張ってください。応援しています。

「就職活動体験記（教員）」

博士前期課程二年　**川原　知也**

「挫折した経験はありますか？」挫折した経験がある人の方が偉いのでしょうか。私にはわかりません。

私は、博士前期課程の学生です。私立の中学高等学校の国語科の教員を志し、就職活動をしてきました。限られた紙面ですので、面接と非常勤講師の話に絞っていたします。

面接での質問はどの学校もある程度共通しています。準備をして臨みましょう。しかし、どんなに準備をしても、本番の緊張感の中では無力だったりもします。また、質問の微妙なニュアンスで、用意してきたままには話せないという場合もあります。私の場合、用意してきたままに話せた場面は一度もありませんでした。私の準備不足だったのかもしれませんが。

そんな私が就職活動を終えて感じたことは、多くの学校の選考を受けるのも一つの手ということです。実践で得られる経験値は桁違いでしたし、なにより、学校ごとの質問の微妙なニュアンスの違いに応えながら質問に答えていく中で、自分の考えの核を見つけられました。他にも、各々の学校の特徴が見えてきたりもしました。

もちろん、この経験は練習で積むこともできます。支援してくれるサービスや先輩、同期など、周りの環境を存分に活用してください。

それから、教育や子どもに関する経験をしておくことをおすすめします。非常勤講師や塾講師、学童の先生など、何でも良いのですが、そのような具体的経験があった方が話に説得力が増しますし、何かとスムーズです。私は塾講師を数年間、非常勤講師を数ヶ月経験していましたが、この二つに関しては面接でかなり突っ込まれました。

非常勤講師については、専門でないお邪魔していたゼミの卒業生の方から、偶然お誘いを受けたことがきっかけでした。どんなご縁があるかわかりませんし、ぜひ色々な授業を受けてみてください。私は他研究科の授業も受講しましたが、大変勉強になりました。

最後に、書き出しに戻ります。私が面接で一番困った質問です。みなさんに挫折した経験はあるでしょうか。そんなことはまあ、どちらでもいいのですが。私は困り果てて、大学院受験の時の話をしました。素直に、無いと言えば良かったですね。答えよりも、その中身の有無、名前ではなく、その中身をじっくりと見つめて、面接に臨んでもらえればと思います。

拙い文章で大変恐縮ですが、将来教員を目指す皆さんの一助になれば幸いです。

大学院に進学して

博士前期課程一年　**小舟　萩**

四月、私は通い慣れたキャンパスに向かっていた。入学式に参加

した後、近くにいた新入生の方に声をかけ、桜の下で写真を撮ってもらった。約一週間前、私はここに卒業式のために来ていて、同じ桜の下で友人たちと一緒に写真を撮っていた。新型コロナウイルス感染症の流行によって、大学三、四年生の頃は思うように大学に行けない時期もあった。それでもやはりこのキャンパスにはたくさんの思い出が詰まっている。

大学院生になり、通うキャンパスが同じではあっても、周りの環境や自分の立場は大きく変わった。まずは授業に関する変化についてである。授業数は減ったが、発表を行ったり、聞いたりすることなどを通して、自分の考えや意見を述べる機会が増えた。先生方や先輩方のご意見を聞き、自分の知識不足を日々痛感している。しかし、授業などを通して、先生方や先輩方、同級生たちがどのようなことに興味や関心をもっているのか、どのように研究と向き合っているのか、それらを近くで感じられることは、自分自身の成長に繋がるとても貴重な経験になっていると思う。

次に自分自身の変化についてである。大学生の頃、私にとって大学院生は遠い存在だったように思う。しかし、自分が大学院生になってから大学生の頃を振り返ると、私はあの頃自分が思っていたような成長ができていないのではないかと焦ることがある。TAとして大学生の授業の補佐を行う時などは、私は大学院生として少しでもお手本のようになれているだろうかと心配になることもある。大学院生として通うキャンパスには、慣れないことも多かった。戸惑いや不安に苛まれた日もある。それでも、指導してくださる先生方、同じく研究に向き合う仲間の存在、支えてくれる方々に感謝しながら、少しずつでも前進していこうと思っている。

通い慣れたキャンパスも変わっていく。今も青山キャンパスでは工事が行われている。見慣れた景色もいつかは遠い日の思い出となっていくだろう。思えば大学四年間はあっという間だった。大学院生として過ごす日々もきっとそうだ。だからこそ、今自分ができることにしっかりと向き合って、焦る日も、迷う日も、悩む日も大切にしていきたい。

夏期集中講義報告

夏期集中講義で学んだことについて

三年　西岡　玲

今年度は筑波大学准教授の関崎博紀先生より「日本語教育の実態」を、グループワークや反転授業を交えながら実践的に学んだ。日本語教師や国語の教師を目指す学生におすすめしたい講義だが、もちろん日本語教育の専門知識は不要で誰にでも理解できるような構成にしてくださった。少人数だからこそ先生や学生同士で密接に考えを深めることができ、多角的な視点が刺激される。普段我々が無意識的に使っている日本語を意識的に見てみよう。義務教育で習った算数は誰かに教えることができるのに、不自由なく使いこなしている日本語は教えることができない。その不思議を楽しむのも本講義の醍醐味だ。

さて、まず学んだのは国内在住外国人についてである。どんな外国人が何の目的でどれほど日本にいるだろうか。そして彼らはどんなシーンでどんな日本語を使うだろうか。調査をする前に、自分の身の回りの生活から思い当たることや想像を働かせて考えを学生たちで共有する。日本語能力の認定基準、それに達するために必要な学習時間と照らし合わせてみると外国人の日本語学習の実態が少し見えてくるだろう。

続いては日常にあふれる日本語と日本語教育だ。当たり前のように目や耳に入る日本語は、日本語を学習する外国人にとってどのように見えているだろうか。例えば「自転車放置禁止」の看板はあまりにも情報量が多いのではないか。「緊急地震速報」は事前知識がないと混乱してしまうのではないか。また、日本語教育について、国内在住外国人はそれぞれ状況が異なりそれらによって優先される学習事項は異なるはずだ。しかしながら状況で分類された日本語教育は発達していない。社会の変化はグローバル化に進んでいるのに、注目すべき事象に目を向けられない。そんな現実をこれを機に考えることになった。

さらに、我々は日本語の指導を体験する。日本人であるにもかかわらず説明に苦戦し、思考力や相

手の立場になって考える力が鍛えられる。正しい“誤り”があることも知る。試しに「に」と「へ」の違いを明確に説明してみてほしい。難しさと面白さを感じるだろう。

最後に異文化コミュニケーションだ。我々は不慣れな文化に触れたとき、真っ向から拒絶していないだろうか。どんな気持ちを抱くか実証して考えることができる。これからどんな姿勢が好まれるべきかを議論し、現状を学んだからこそ必然的に平和なものへとなった。

以上のことを四日間通して体系的・実践的に学ぶことができた。私は義務教育に「日本語教育」の授業を取り入れたいとまで感じるようになった。グローバル化の現状についていくため、生徒の思考能力を強く発展させるための手段になると考えたからだ。夏季休暇中に「考え、コミュニケーションを通じて共有する」ことで我々の眠りつつある脳は再び目を覚ました。日本語や日本語教育にもっと大きな注目が向くことを願う。

留学生の動向

教授　山崎　藍

二〇二二年五月現在、本学に在籍している私費留学生は二二五名、うち文学部全体で私費留学生は五六名、そのうち日本文学科所属の学生は三二名で、学科単位でみた場合、在籍数が最多となりました。今年度新たに留学した私費留学生は六名、国籍は中国と韓国からでした。学部だけではなく大学院にも留学生がおり、博士前期課程は四名、後期課程は二名在籍し、そのうちの一名が国費留学生です。

今年度は原則対面授業での開講となりました。昨年度まで続いていたオンラインでの参加も一区切りし、皆がキャンパスでの留学生活を楽しめるようになったのは、大変喜ばしいことです。

一年次の留学生向けの授業「日本文化文学入門」で使用しているテキスト『留学生のための日本文学入門』の改訂版が昨年新たに出版されました。対面講義に戻った今年度は、より一層きめ細やかなサポートが出来ればと思っています。

二〇二二年四月に留学生担当教員に着任いたしました。コロナ禍以前は、例年、教員とチューターとで、留学生と共に年に二回の文化交流活動を行うことが続いていました。しかし今年四月の段階で罹患者が減る兆しがなく、残念ながら春の交流事業を中止しました。その後もコロナ禍の猛威は収まることなく罹患者も増加の一途をたどり、夏は日本が世界中で罹患者が一番多くなったと報道されるに至り、本学も7月の段階で九〇〇名弱の罹患者が報告されてしまいました。秋になって落ち着いてきたものの、依然として青山キャンパスがある東京だけで四桁の罹患者数が続いています。長年留学生担当教員をなさっていた佐伯真一先生がご退職となり、昨年度担当された韓京子先生もサバティカルでご不在の中、コロナ禍も重なって、手探りでの運営となってしまいました。毎年秋は留学生とチューター、教員の有志が大学近くを散歩・観光することが多いのですが、飲食を伴う交流は禁止するようにとの大学の通達を受け、どのような交流をすべきか、模索する日々が続いています。留学生とチューター、教員とのコミュニケーションは当然必要ですが、今後は留学生と日本人学生との交流の機会を設けるなどの必要性があると感じています。

最後に今年度のチューターをご紹介します。学部の留学生には毎年日本文学科の上級生がチューターとして指導にあたっています。コロナ禍以前は4名程いたチューターも人数が減り、今年度は昨年度同様二名が務めてくれています。以下、担当してくれた王雨歌さん、菊池野乃花さんからのコメントです。

コロナ禍ではありましたが留学生たちとの交流によって、自分自身学ぶことや気付かされることが多く非常に貴重な経験になったと感じています。頼りになるチュー

ターを目指して留学生たちとの信頼関係を築き、これからもサポートしていきたいと思います。（王）

学生生活において履修登録というのは私たち日本人でもぶつかる壁でしたので、慣れない土地で生活を送る留学生にとっては非常に大変なものだと思います。彼らの学生生活を円滑にするために、私たちチューターの存在というものは少なからず支えになったのではないかと感じています。（菊池）

秋の交流事業が原稿提出に間に合わなかったため、今回は昨年度の写真を掲載します。チューターは留学生にとって大変重要なサポーターです。関心を持って下さる方は是非立候補してください。

今年度の学生の活躍

【二〇二二年度青山学院大学学業成績優秀者表彰】

◇学部最優秀賞　山岸愛花梨（四年）

◇学部優秀賞　福井咲希（三年）、沼口咲子（二年）

◇学部奨励賞　岩井瞳（四年）、堤友香（三年）、鶴岡文芽（二年）

◇大学院研究科優秀賞　ＸＵ　ＺＩＷＥＩ（二年）

【京菓子展「手のひらの自然―枕草子」２０２２（公益財団法人有斐斎弘道館主催】◇茶席菓子実作部門　審査員特別部門　荒木浩賞　藤本まどか（三年）

【杉原ウィーク２０２２・第23回杉原千畝記念短歌大会（岐阜県八百津町）】

◇心賞　武藤美悠（二年）

いつの日か私たちの知る泣き声は
命の始まりのときだけになれ

◇奨励賞　鶴岡文芽（二年）

【第16回全日本学生・ジュニア短歌大会（日本歌人クラブ主催、文化庁・毎日新聞社・東京都教育員会後援）】

◇高校生、大学専門学生の部　選者賞　新井日向（三年）

この虹を向こう側から見る人もぽかんと口を開けてるかしら

◇同　秀作賞　佐々木美友（二年）

マスクとり自分を解放する瞬間下着脱ぐより遥かにはだか

蓮江友佳子（三年）

「別れよう。見たんだ昨日、」隣席の時が止まった。本でも読むか。

富田美月（四年）

非常口走り続けるランナーは緑の世界が平常である

《二〇二〇年度》（学年は当時）

【第９回桧原桜賞（福岡市桧原桜賞実行委員会主催、福岡市教育委員会、西日本新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、朝日新聞社等後援）】

◇秀作賞　黄郁婷（博士後期課程三年）

インスタに載せたさくらに台湾で
友らがわあっと歓声あげる

【第27回「前田純孝賞」学生短歌コンクール（兵庫県新温泉町・新温泉町教育委員会・神戸新聞社主催）】

◇大学生の部　前田純孝賞　福井花菜（三年）

夏の日を浴びて帰ったわが顔はマスクの形にくり抜かれてた

◇同　準前田純孝賞　松本のぞみ（三年）

まだ少し夏に居たくて爪先にとびきり光る青色を塗る

◇同　選者賞　竹田菜純（四年）

電話口できっと頭を下げている君
だから許すでも早く来て

◇同　新温泉町長賞　富山くるみ（二年）

朝六時彼のスポーツウェアの香を
察知し犬はリード引っ張る

二瓶遥（三年）

積み上げた想いを全て知る空は彼
呼び止めた我の背を押す

◇同　新温泉町教育長賞

松下彩夏（三年）

花火果て屋台もつぎつぎ閉まりゆ
くもうすこしだけここにいたいの

三井らん（三年）

サンダルの出番は終わり来年を思
い描きて落とすペディキュア

◇神戸新聞社賞

青木楓（二年）

秋風がスカートあげよとそそのか
す校則破って駆ける放課後

渡邉万里奈（四年）

ひとつずつ席空け座したサラリー
マンピアノの黒鍵並ぶようだね

◇学校特別賞　青山学院大学

日本文学科関係書籍

＊二〇二一年一一月から二〇二二年一〇月までに出版された日本文学科専任教員（旧教員も含む）、日本文学科および大学院日本文学日本語専攻卒業生が出版した日本語・日本文学・日本語教育に関する図書を紹介します。未掲載の図書については情報をお寄せください。

《二〇二〇年》（追補）

◆曽倉岑『記紀萬葉精考』（花鳥社、八月）

《二〇二一年》

◆小松靖彦『戦争下の文学者たち―『萬葉集』と生きた歌人・詩人・小説家』（花鳥社、一一月）

《二〇二二年》

◆土方洋一『枕草子つづれ織り清少納言、奮闘す』（花鳥社、一月）◆木村政樹『革命的知識人の群像―近代日本の文芸批評と社会主義』（青土社、二月）◆吉田昌志『夏目漱石　修善寺の大患前後―昭和女子大学図書館近代文庫蔵新資料を加えて』（昭和女子大学出版会、二月）◆小松靖彦編『戦争と萬葉集』第4号（戦争と萬葉集研究会、二月）◆大上正美『嵇康の方法―文学としての「論」』（研文出版、二月）◆小松靖彦他編『未墾地に入植した満蒙開拓団長の記録―堀忠雄『五福堂開拓団十年記』を読む』（文学通信、三月）◆近藤泰弘・澤田淳編『敬語の文法と語用論』（開拓社、三月）◆清水眞澄『安居院の研究　能説の系譜と水系の信仰』（三弥井書店、三月）◆田中祐輔編『日本語で考えたくなる科学の問い〈上〉〔文化と社会篇〕探求・活動型日本語教科書』（凡人社、四月）◆澤田淳訳、チャールズ・フィルモア『ダイクシス講義』（開拓社、四月）◆田中祐輔編『表現するための語彙文法練習ノート〈上〉―　語/コロケーション/慣用句/表現文型』（凡人社、五月）◆田中祐輔編『日本語で考えたくなる科学の問い〈下〉〔心と身体篇〕探求・活動型日本語教科書』（凡人社、一〇月）◆佐伯真一他『四部合戦状本平家物語全釈　巻十二』（和泉書院、一〇月）◆田中祐輔編『表現するための語彙文法練習ノート〈下〉―　語／コロケーション／慣用句／表現文型』（凡人社、一〇月）

院生部会報告

博士後期課程二年　唐　銘遠

本年度の院生部会の活動として、まず院生部会が運営を担っている査読誌『緑岡詞林』についてオンライン上で議論を交わした。議論は主に会計に関連する書類を中心に行い、従来の規定の確認や実行上の難点などについて、多くの有意義な意見が集まった。それらの意見をもとに、今まで明確でなかった部分をより明瞭な内容へと改め、今後の引継ぎがスムーズに行われるための基盤を築いた。議論からは、本誌の運営をよりよきものにしようと願う、院生部会会員一人一人の熱意が切に感じられた。院生部会としては、これからも本誌の運営の改善と制度の見直しを通して、投稿希望者・編集委員が投稿・査読を行いやすい環境づくりを引き続き心掛けて行く。今後の玉稿の投稿先として、ぜひ本誌をご検討いただきたい。

次に、本年度も例年通り中間報告会を無事開催することが出来た。コロナ禍の影響もあり、本年度の中間報告会もオンライン開催することが決まり、本番に備えて事前にリハーサルも行った。オンライン開催ということもあり、資料共有の際のトラブル回避や発表時間経過の通達方法などについて、発表者や先生方から貴重なご意見が寄せられ、その成果あって中間報告会は無難に閉会の時を迎えることが出来た。本年度の中間報告会を経て、院生部会としても重要な経験を積むことが出来、今後も発表者が発表しやすく、質問者が質問をしやすい、有意義な議論が行える中間報告会を試みて行きたい。そして、この度報告をされた発表者の皆様のこれからのご健闘を御祈り申し上げたい。

最後に、本年度は院生研究室のインクなどの備品を購入することを決定した。備品購入は院生研究室運営において、院生の研究を補助するために推進されてきたもので、既に前年度から備品購入用の予算が組み立てられていた。その甲斐あり、この度インクやその他備品の不足が判明した時点ですぐ対応が可能となり、研究に必要不可欠な設営を行うことが出来た。院生部会では、院生の皆様の研究上におけるニーズに引き続き耳を傾け、更なる研究環境の向上を絶えず目指して行く。また、その過程では皆様のご協力を是非頂戴いたしたく、院生部会としては皆様との絆を確固として保って行きたい。

研究室探訪

滝澤みか先生編

＊何を専攻して研究なさっているのですか？

軍記物語と呼ばれる、いくさを題材とした文学作品を研究対象としています。どのように作品が生まれ、改作され、その後の時代に享受されていったのかという、軍記物語の変遷を主な研究テーマとしています。

＊その分野を専攻なさったきっかけや理由はなんですか？

軍記物語を研究対象としたのは、小さい頃から歴史や古典文学の世界が好きだったことがきっかけの一つかと思います。母校（大学）では専攻は入学時ではなく二年生になるときに決まる制度で、一年生の前期までは、文学は自身で読み、大学での専攻は日本史にしようかなと思っていました。そうした中で一年生の後期に履修した近世文学の講義に衝撃を受けまして。作品の面白さを明らかにしながら、本文に込められている当時の社会への作者の見方をも読み解いていく回があり、文学の研究ってこういうこともするんだ！と、研究の奥深さに触れた瞬間でした。そうしたことも契機となって日本文学を専攻しました。その後、中世文学が好きで履修した科目が、後に恩師となる先生の『平家物語』（以下、平家）の講義でした。授業がとても魅力的で、以降はその先生をひたすら追って履修をしていました（そして次第に色んな授業を受講している学生として先生に顔を認識され…笑）。母校にはゼミ制度はなかったので、三年生のときには研究班という自主ゼミのようなものにも参加し、卒論も平家で書いていました。ただ、四年生のときには就活も終えていましたし、普通に卒業するつもりでいました。ですが、教育実習に行きまして…、教壇に立ち、大学でもっと勉強したくなってしまいました。

＊そこがターニングポイントなんですね！

実習自体はひとまず終わったのですが、その期間中、自分のそれまでの勉強を振り返って、もう少し自身で学びを深めたく思い、進学の道を選びました。私が大学院に入った年（二〇一一年）は社会情勢の影響で新学期が一ヶ月ほど遅く始まったこともあって、その間に軍記物語の作品を色々と改めて読み直して、中でも『保元物語』（以下、保元）『平治物語』（以下、平治）が面白いなと感じ、以降はこれらの作品を主な研究対象としてきました。

＊先生の母校の研究班では何をされるんですか？

そのときの参加者で異なるのですが、私が参加していたときは平家の諸本比較や内容の考察をし、それをレジュメにまとめて発表をしていました。研究班は学部生のときは参加者が私一人だったので、先生と一対一で作品を読むこともありました。振り返ると、とても贅沢な時間でしたね。

＊先生が思われる軍記の最大の魅力について教えてください。

諸本が多いことは面白さの一つかと思います。保元平治の場合、これらの作品は鎌倉時代の前期に成立していくのですが、その後も何度か改作されていきます。大きく分類すると、比較的古い段階のものがあって、次にまた新たな形で平家の世界などとも混ざり合った内容の本文が作られていきます。そのときに登場人物の性格も平家に書かれた姿に合うように変わっていくこともあります。さらにその後も改作はされ、「流布本」と呼ばれる本の成立に至ります。近世以降に最も読まれ、流布していくのですが、広く読まれた本文であるにもかかわらず研究があまりされてきませんでした。ですがたくさん面白いことが込められた本文で、私はこの流布本を主に研究しています。

また、いくさがもたらす悲劇を書き留めていることも挙げられるかと思います。軍記物語というと、武士たちが戦っている作品というイメージが強いかもしれませんが、それだけではなく、敗者側

の妻や子どもがどういう道を辿るのかという哀話を書いていることも作品の魅力と言いますか、大事な面だと思っています。

＊登場人物の性格なども変わってしまうほどの内容の違いがあることを初めて知りました。

清盛の例が分かりやすいかもしれません。平家だとおごれる人として位置付けられていますが、清盛は保元平治にも登場していて、初期の段階の平治に出てくる清盛は平家に書かれた姿と必ずしも一致するわけではないんです。それが、平家が広く読まれた時代の本文になると情けない姿が加えられたりして、造形が明らかに変わっているのですよね。

＊国文学研究資料館（以下、国文研）ではどんな活動をしていましたか？

国文研には二〇一八年から一年間勤めていました。海外にある日本文学関連の機関との連携を進める国際連携部という部署で、機関研究員として年一回行われる国際日本文学研究集会という会の運営のお手伝いや雑誌の編集をしたりしました。

＊国際連携とは具体的にどのようなことをするのですか？

活動の一部になりますが、例えば海外にある日本文学関連の資料を持つ機関や大学と国文研とが連携し、日本文学に関するセミナーが現地で開催されていました。また、勤めている間に一度、国文研の先生方がアメリカで開催される大きな学会において国文研の活動を紹介しに行かれるとのことだったので、ご一緒させていただいたこともあります。日本文学を研究する場所は海外にもたくさんあることを実際に目にすることが出来て、貴重な経験でした。

＊研究室ではどんなことをしていますか？

四年生のゼミは研究室に集まって行っています。その他にはオンラインで行われる会議や学会にも研究室から参加しています。基本的には授業日と、会議や作業がある日は研究室に来ていますね。研究に必要な主な書籍は自宅にあるので、研究は自宅で行うことが多いです。

＊先生の宝物はなんですか？

この研究室にあるものでは、前に勤めていた大学のゼミ生たちが贈ってくれた色紙です。個別に手紙を書いてくれた学生もいて、お守りとしてどちらも大切にしています。色紙は初めて受け持ったゼミ生からのもので、こうしたものを用意してくれていることを知らなかったので、もらったときにはとても驚きました。この先も何かつらいことがあったときに見ようと思っています。

＊美術館や博物館などにはよく行かれますか？

実は今日（インタビューを実施した日）も、以前から注目していた東京都美術館の展示を観に行きました。通常はボストン美術館にある『平治物語絵巻』が展示されているということで。

青学生の皆さんには、東京国立博物館の平常展（総合文化展）がおすすめです。青学はキャンパスメンバーズの制度に加入しているので（二〇二二年度時点）、平常展は無料で観覧できるかと思います。ふらっと立ち寄るだけでも見るものが多く、楽しいですよ。

青学から比較的近くにあるところでは、根津美術館や太田記念美術館も行きやすいかと思います。随分前になりますが、根津美術館で改装や修理によって形を変えた絵画や茶道具などを集めた展示があり、テーマが面白く、印象に残っています。

＊学生に向けてメッセージをお願いします。

青山学院大学の魅力の一つは、学ぶための環境が充実していることだと思います。各時代の文学や日本語・日本語教育に関する多様な研究を専門とされている先生方が揃っており、学生の皆さんのさまざまな関心に応えられる環境だと思うので、それぞれの興味のある分野の学びを思いっきり深めてもらえればと思います。また、図書館やデータベースも充実しています。地方の大学ですとデータベースの契約や図書館の状況が厳しいところもあり、環境が全てではありませんが、比較すると青学は設備がとても整っている大学なので、ぜひ活用してみて下さい。

図書館に足を運んで本を開けば、資料は平等に学びの機会を私たちに与えてくれます。学ぶことを楽しみつつ、在学中の一つ一つの出会いを大切にして、皆さんがこれから社会を見ていくための自分なりの軸を、大学生活の間に築き上げていってもらえたらと思います。

日本文学科同窓会から

日本文学科同窓会会長
松岡　嗣直

皆さん　こんにちは　お元気でお過ごしでしょうか。皆さんがこの会報をお読みの際には、コロナが収まっていることを祈っています。

ところで昨年は、２００２年９月23日青山学院大学同窓祭の日に日本文学科同窓会が創設されて20周年の記念すべき年でした。そこで創設20周年記念活動の一環として、日本文学会の後援を受け、文芸講演会を開催しました。片山先生のご紹介で作家・翻訳家の松本侑子さんをお招きし、「金子みすゞと詩の世界～大正デモクラシーと童謡運動」と題して、金子みすゞの詩と生涯・弟雅輔について語って戴きました。

この講演会ではZoomミーティングを使用し、松本先生にはご自宅からお話し戴き、同窓生は自宅のPC・スマホで視聴し、青山キャンパスの教室では現役の学生・大学院生が聴き入るというオンライン方式でライブ配信しました。技術的な面では近藤先生はじめ日本文学科の先生方の多大なご支援を受けました。

ここで改めて日文同窓会の目的を確認しますと、会員相互の親睦、教養の向上、日本文学科の発展への寄与が三本柱となります。その点からも今回の記念講演会はまさに目的に叶っています。今後もこういった方式でのイベントを企画していきたいと思っています。いいプランがありましたら是非ご提案ください。

また、同窓会会報「ひぃふぅみぃ」は創設20周年記念特別号として年末に刊行しました。

日本文学科の先生方を始め日本文学科同窓生の貴重な回想・証言・提案を数多く掲載しました。ご協力戴いた方々に御礼を申し上げます。有難うございました。

なお、今後は「校友会」「大学部会」の『日本文学科同窓会ホームページ』を「掲示板」として、『日本文学会会報』や『あなたと青山学院』同様、同窓生との情報共有の場としていきたいと考えています。メールアドレスも載っていますのでどうか宜しくお願い申し上げます。

因みに松本先生の講演に関する文章も「日本文学科同窓会ホームページ」の「活動報告」に載っていますので、是非お読みください。

二〇二二年度講義題目

〈大学院〉

上代文学演習（一）
日本文学研究の方法　小松　靖彦

中古文学演習（一）
『源氏物語』を読む　土方　洋一

中古文学研究（二）
『源氏物語』の本文と注釈　高田　祐彦

中世文学演習（一）
『保元物語』の輪読　滝澤　みか

中世文学研究（二）
『続千載和歌集』研究　山本　啓介

近世文学研究（一）
江戸時代の遍歴小説を読む　大屋多詠子

近世文学演習（二）
『三題咄高座新作』の台本を読む　日置　貴之

近代文学演習（一）
研究テーマの展開を図る　片山　宏行

近代文学演習（二）
近現代学会発表論文の完成　日置　俊次

近代文学演習（三）
昭和期の作品からさぐる近現代文学の文化・思想　佐藤　泉
日本語学演習（一）
コーパス言語学の理論と方法　近藤　泰弘
日本語学研究（二）
古典語解釈文法研究　澤田　淳
日本語学演習（三）
言語構造と語用論―文脈とその操作―　大堀　壽夫
日本語教育学研究
ＪＳＬ児童生徒を対象とした日本語教育の課題と現状　田中　祐輔
中国古典学演習
『文選』精読　山崎　藍
日本文学研究（一）
近代における日本文学研究の形成・展開のあり方について　衣笠　正晃
日本文学研究（二）
戦後の短編小説を精読する　石川　巧

〈学部〉

文学研究法
日本文学研究の基礎や方法を学ぶ　小松　靖彦
佐藤　泉
大屋多詠子
滝澤　みか

日本文学史
上代・中古文学史　高田　祐彦

中世文学史
山本　啓介

江戸時代の文学史
大屋多詠子

近代文学史
片山　宏行

古典文学概論
学問的な視点から見た古典の魅力と古典を読むことの意義　土方　洋一

近代文学概論
短編小説の世界　日置　俊次

漢文学概論
中国文学が日本文学に与えた影響について　山崎　藍

日本語日本文学情報処理法
コーパスを活用した日本語の分析方法　三好　伸芳

日本語学概論
日本語の仕組みを学習する　近藤　泰弘

日本語史
日本語の歴史について考察する　澤田　淳

表象文化研究概論
表象文化研究の理解と実践　渡部　裕太

日本学入門
日本文化の諸相を考える　梅田　径
日本文明史（英語講義）　孫　世偉

文学交流入門
日本文学と外国文学の影響関係　梅田　径
戦時期の日本と中国の作家交流（英語講義）　孫　世偉

日本文化文学入門
留学生のための日本文化文学入門　山本　啓介

日本文学演習
詩を読む（基礎編／応用編）　小松　靖彦
『古事記』の精読　金澤　和美
『源氏物語』賢木巻の精読　高田　祐彦
『枕草子』精読　土方　洋一
『蜻蛉日記』を通して平安時代の結婚について考える　吉野　瑞恵
『新古今和歌集』の輪読　山本　啓介
『平家物語』の輪読　滝澤　みか
『真那護清姫之由来』の輪読　杉山　和也
浮世草子『御伽人形』を読む　岡島　由佳
黄表紙『御存商売物』を読む
黄表紙『案内手本通人蔵』を読む　大屋多詠子
浅井了意『伽婢子』を読む　大木　京子
卒論を想定した発表・意見交換　片山　宏行
現代短歌の研究と実作　日置　俊次
大正から昭和初期、戦後の批評、論争、小説　佐藤　泉

幻想文学の〈異界〉コードを検証する　西井弥生子
芥川龍之介作品の精読　木村　政樹
泉鏡花『草迷宮』の精読　富永　真樹

翻訳演習

翻訳を批判的に考察し、「日本文学」の特徴と受容を考え直す　WALLER, Loren David

中国古典文学演習

中国古典詩歌（楽府、六朝詩、唐詩、宋詩、宋詞など）の精読　山崎　藍

中国文学・思想演習

漢籍の写本を用いた基礎的な書誌学の知識習得と調査実践　髙田　宗平

文学交流演習

日本文学における法・制度を精読しジェンダー論や人間・動物について学ぶ　SEN, Raj Lakhi

日本語学演習

敬語の多角的・総合的研究―敬語とは何か―　澤田　淳
日本語教育における文法教育の位置づけを理解する　庵　功雄
文法史、語彙史に関する代表的な事項や研究方法について学ぶ　中川　祐治
日本語学研究の方法論全般について　近藤　泰弘
日琉語族の変異について　中川奈津子

日本文学講読

『うつほ物語』前半部を読む　千野　裕子
中世日本において日本の最果てはいかに認識されたか　杉山　和也
芥川賞から見る戦後日本文学史　帆苅　基生
上代文学の代表作品を原典で読む　孫　世偉
狂歌の歴史と近世狂歌の位置づけ　牧野　悟資

中国古典文学講読

中国文学作品を分析し、中国文学への理解を深める　山崎　藍

日本語学講読

日本語学の理念と研究手法を学ぶ　庵　功雄
書道の歴史と実技
書の歴史をふまえた基本的事項の理解と技法の習得　山下　由季　永由　徳夫

日本語教育概論

日本語の授業を行うために必要な知識や技術について学ぶ　田中　祐輔

日本語教授法

日本語非母国語話者に日本語を教えるための必要な基本知識を学ぶ　川端　芳子

特別演習

『萬葉集』・書物学・文学交流に関する卒業論文作成指導　小松　靖彦
平安時代の文学、及びそれに関連する対象を扱う卒業論文作成指導　土方　洋一
平安時代の物語・和歌を対象とした卒業論文作成指導　髙田　祐彦
短詩形文学とそれに関連する作品を対象とした卒業論文作成指導　山本　啓介
主に中世文学を対象とした卒業論文作成指導　滝澤　みか
近世後期の文学を対象とした卒業論文作成指導　大屋多詠子
近現代文学を対象とした卒業論文作成指導　片山　宏行
近現代の文化、文学、思想に関する卒業論文作成指導　佐藤　泉
卒業論文作成指導　日置　俊次
主に中国文学を対象とした卒業論文作成指導　山崎　藍
日本語学を対象とした卒業論文作成指導　近藤　泰弘
日本語学関連をテーマとした卒業論文作成指導　澤田　淳
日本語教育に関する卒業論文作成指導　田中　祐輔

日本語教育演習A

日本語教育と教材・教具について理論的、実践的に学ぶ　田中　祐輔

日本語教育演習B
教科書分析や教室活動体験から日本語を教えることを考える
木田　真理

日本文学特講
『萬葉集』におけるジェンダーと〈私〉／戦争下の『萬葉集』受容におけるジェンダーと〈私〉
小松　靖彦
平安時代の和歌を深く読むための視点について
高田　祐彦
『枕草子』と『紫式部日記』―女房日記の世界―
土方　洋一
『新古今和歌集』の歌人達の和歌と連歌
山本　啓介
軍記物語の生成と展開
滝澤　みか
『百物語』の読解
岡島　由佳
『椿説弓張月』の武者と動物
曲亭馬琴の中編読本
大屋多詠子
菊池寛の小説を読む
片山　宏行
文学作品から近現代の「生」「死」の概念とその効果、変容を考察
佐藤　泉
横光利一研究―短編小説の世界―
日置　俊次
日本の伝統文化と文学／日本の近代文化と文学
小松　靖彦

文学交流特講
世界の中の日本演劇―能を中心に―
竹内　晶子

日本文学とアジア
中国近代の文学と思想を学び、中国と日本の関係を考察する
吉田　薫

日本文学とアメリカ・ヨーロッパ
世界各地の神話について
沖田　瑞穂

表象文化論
能と狂言についての多角的な考察
岩崎　雅彦
演劇・芸能における女性表象について考える
日置　貴之
「表象文化論」の概要を把握する
大山　英樹

日本文学特講A
日本の伝統工芸や美術の体験を通して、日本文化を深く理解する（英語講義）
孫　世偉

日本文学特講B
日本近代文学に関わる技術・テクノロジーを通して、日本文化を深く理解する（英語講義）
孫　世偉

日本文学特講A（集中講義）
日本語教育という分野について知識を身に付ける
関崎　博紀

日本文学特講B（集中講義）
尾崎翠『第七官界彷徨』と前川佐美雄の短歌・歌論を読む
石原　深予

中国文学・思想特講
中国文学や思想を身体と感覚に関する視点から読み解く
松浦　智子
漢字について深く考える
戸内　俊介

中国古典文学特講
李白や杜甫を中心に、唐詩を検討する
山崎　藍

日本語学特講
電子化コーパスを利用して文法記述を行うための方法論を学ぶ
近藤　泰弘
日本語の特質を探る―ダイクシスからみる日本語―
澤田　淳
日琉語族の変異について概観する
中川奈津子

日本語教育特講
日本語教育の歴史および日本語教育の課題と展望について学ぶ
田中　祐輔

日本語教育実習
日本語上級レベルの外国人留学生を対象としたクラスの開講の準備、授業実施、事後評価活動
田中　祐輔

日本文学研究のための英語
日本文学の研究に役立つ英語力を伸ばす
WALLER, Loren David

音声表現法
日本語学習者の発音を通して日本語の音声にはどのようなしくみがあるのかを学ぶ
木下　直子

文章表現法
読み手を意識した文章表現の実践・文章技術の向上
木村　寛子

書理論
日本における手書き文字の歴史について書表現の観点から展開を通覧する
笠嶋　忠幸

【研究室だより】

＊二〇二二年三月の卒業生は一一六名、四月入学生は一三七名でした。大学院前期課程の三月修了生は一名、四月入学生は三名でした。後期課程の修了生は一名でした。

＊二〇二二年度から新たに非常勤講師として、庵功雄、石原深予、大山英樹、岡島由佳、笠嶋忠幸、木下直子、関崎博紀、戸内俊介、富永真樹、中川奈津子、中川裕治、永由徳夫、日置貴之、吉野瑞恵、SEN, Raj Lakhiの諸先生方にご尽力いただいています。

＊二〇二二年度は、澤田淳教授が学科主任を務められました。

＊二〇二二年度は韓京子教授が在外留学（ソウル大学日本研究所）のため休講なさいました。

＊二〇二二、二三年度に小松靖彦教授が国際センター所長に就任しました。

＊二〇二二年度日本文学大会（春季）は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となりました。

＊二〇二二年度日本文学会大会（秋季）・講演会・総会が、十一月二十六日に開催されました。講演会については本会報五頁をご覧ください。

＊山崎藍教授が、青山学院学術賞を受賞されました。

＊田中祐輔准教授が、第一回岩佐賞（SDGsジャパンスカラシップ岩佐賞）」（教育の部）を受賞されました。

＊副手の中村花緒さん、佐藤美仁華さんが退任され、四月から北川遥香さんが着任されました。

＊二〇二二年四月より中世文学がご専門の滝澤みか准教授が着任されました。

＊二〇二三年三月をもって中古文学がご専門の土方洋一教授、日本語学がご専門の近藤泰弘教授が定年のため退職されます。

【編集後記】

はじめに、この「会報」の作成にご協力いただいたすべての方々に、厚く感謝を申し上げます。

新型コロナの影響で、「会報」も一昨年と昨年はさまざまな変更を余儀なくされましたが、今年はコロナ禍以前に行われていた企画がいくつか復活しています。

私自身、一年生のころに日文委員として担当した唯一の仕事がその年の「会報」の特集「コロナ禍の日常」への寄稿でした（ほかの委員とは一度も顔を合わせず……）。今年、日文委員は過去二年より担当する箇所が増え、研究レポートや研究室探訪などに携わっています。

私は今回、研究レポートを担当しました。少し大変だったのが字数に関してです。ふだん授業や演習で書くものは下限の指定はあれど、上限は設けられないものがほとんどです。情報を追加していくことには、慣れていたり、あまり苦にならない感覚を個人的に持っていたりしますが、今回は短くまとめなければならなかったので、重要な情報のみを残して余計なものをそぎ落としていくということが必要でした。やっているなかで自分の文章のクセのようなものに気づいたりしました。

日文委員会も、昨年度から少しだけ活動を増やしました。ひとつ挙げたいのは日文新聞です。二〇二〇年四月から製作が途絶えていましたが、自分自身、素敵な営みだと感じていたので、形式をいろいろと変えつつ、今年度再び委員会でつくってみました。どのような形でも続いていったらいいなと思います。

何もかもが「以前のように」戻る必要はないかと思いますが、それでも途切れている、続かなくなることが惜しまれるものもたくさんあるような気がします。そういったものの存在を忘れずにいたいです。

（魚津嵯矢人）

編集委員
教員　佐藤　泉　片山　宏行
学部三年生　魚津瑳矢人
学部二年生　北村　結子
学部一年生　米山すみれ

会　報　第五十七号
二〇二三年三月一五日　発行
渋谷区渋谷四―四―二五
青山学院大学総研ビル10F
日本文学科研究室内
編集　青山学院大学日本文学会
電話　（〇三）三四〇九―七九一七
FAX（〇三）三四〇九―八〇〇五